現地レポート2　交流で育つ　農村体験で変わる！

発見がいっぱい農家の暮らし

自然も農業もすごく新鮮

地域の元気を育む子どもたち

ジュースで乾杯！　今日はお疲れさまでした

■長野県飯田市による農業・農村体験の受け入れ

長野県の飯田市では、平成８年よりグリーン・ツーリズム事業を推進し、「体験ツアー」「ワーキングホリデー（援農）」を実施しているほか、子どもたちに向けて「体験教育旅行」や「子ども長期自然体験村」を行ってきた。また、小学校を対象とする「どんぐりの森小学校」や一般市民を対象とする「南信州あぐり大学院」を開校。ユニークなプログラムを設けて、農業体験学習の普及を促進している。平成 13 年には、これらの事業を担う公社を設立した。また、南信州あぐり大学院のセミナー拠点にもなっている「ごんべえ邑」（農業生産法人）、農業公民館「あざれあ」も誕生している。

本物の農作業体験で、たくさんの実感を得る

飯田市の農家が人と自然をテーマとした「体験教育旅行」の一環として子どもたちの受け入れを本格的に開始したのは平成 10 年のことだ。乗馬やラフティング(川下り)などのスポーツ、ツル細工や機織りなどの工芸、自然体験、歴史探訪といったこれまでのプログラムに新たに農業体験というメニューが加わった。これは子どもたちが３・４人ずつ農家にホームステイし、その家の農作業や家畜の世話などを手伝うというもの。学校行事として参加する場合もあるし、個人で応募する企画もある。夏休みを利用して開催される「子ども長期自然体験村」は全国の小中学生が対象、これにも“ファームステイ”が組み込まれている。

あえて農家での農業体験というメニューを打ち出したのは、農業を知らない今の子どもたちに農村の日常生活を体験してもらい、農家の暮らしや思いをきちんと知ってほしかったからだ。だから、受け入れ農家では秋の収穫に大きく影響する田植えなど大切な仕事も子どもたちにどんどん体験してもらい、農家の実態を知ってもらおうと考えた。

「観光としてではなく、その時期に農家がやるべき本物の農作業を体験してもらいます。だから、それぞれの農家によって体験できる内容は異なります」と、体験プログラムの開発やコーディネートを担当している飯田市が出資する観光公社の高橋さん。

農家の人たちの真剣な仕事ぶりは、いっしょに作業をする子どもたちにもしっかり伝わってくる。子どもたちは、体験を通して自然の偉大さ、農業のきびしさ、食の大切さを知る。そして、穫りたての旬の野菜のおいしさ、農作業の後の充実感と爽快感、楽しい団欒をも実感するのである。

子どもとのふれあいが、地域を見直すきっかけに

平成13年度、飯田市が体験教育旅行で受け入れたのは中学生を中心に100団体計2万人。これらの子どもたちがすべて農家に宿泊したわけではないが、ファームステイの希望者は年々増加している。受け入れ農家も現在、10地区250軒にまで増えた。

とはいうものの、最初はどの農家も外から来る子どもたちをどう受け入れたらよいか、とまどっていた。

「都会の中学生も自然のなかでは、みんな一生懸命。飛んだりはねたりしながら手間（手伝い）をくれて、それで『楽しかった』って言ってくれます。子どもたちは農業をからだ全体で体験しているって感じですね」

果樹園を営んでいる原さん夫婦は子どもたちといっしょにりんごの花摘みや袋がけをしていると、しだいに心が元気になってくるのを感じるという。

「動物は苦手だという子どもが楽しそうに牛や豚の世話をするようになったり、いやいや畑仕事をしていた子どもがだんだん作業に没頭してくるのも珍しいことではありませんよ」と川手さん。

「どうして都会の子たちはホタルや星にあんなに感動するのかなって、うちの子たちに言われて。まず私たち大人が田舎のよさを思い出さなくちゃいけないですね」

東京出身の川手さんの奥さんは、子どもたちのファームステイを引き受けたことで、飯田の子どもたちにも多くの発見があったはずだという。わざわざ遠くから泊まりがけで農業体験に来る子どもたちとふれあうことは自らが住む地域を、農業を見直すきっかけにもなる。

子どもたちを家に受け入れることで、一番元気になったのは、おじいさん、おばあさんかもしれない。子どもたちはお年寄りの昔話にじっくり耳を傾けたり、昔ながらの手仕事について質問を浴びせたりする。子どもたちのファームステイはお年寄りの出番をもつくりだした。

見たこと、聞いたこと、やったこと、話したいことはいっぱい！

農業体験の帰路――バスや列車の中の子どもたちは、いつもよりお喋りだ。みんな自分の体験を話したいし、ほかの子の体験も聞いてみたい。

よその家に子どもたちだけで泊まること自体、かなりの緊張を強いられるのに、そこの家族とともに仕事をし、ご飯を食べ、いっしょに暮らした――その自信がみんなの顔に現れている。大嫌いだった野菜を食べられるようになった子もいる。家畜の世話はやっぱりいやだと思った子もいるだろう。農家のおじさん、おばさんと肩を並べて畑仕事をした子は、ちょっぴり大人になったような気がしているかもしれない。

初めての田植えを棚田で体験する

学校ではあまり目立たなかった子が農業体験では積極的に動きまわって活躍することも少なくない。日頃、親とさほど会話をしない子も農業体験については、さまざまな感想や意見を語る。そして、親といっしょにお世話になった農家を再び訪ねる子どももいるという。

農業体験は、子どもたちそれぞれに異なった強烈な手ごたえをくれる。子どもの心の中には、それぞれの農村の風景が刻み込まれたはずである。

農村体験で、子どもたちが、農家が、農村が、元気に

「ふだんのままでいいなら・・」と、ファームステイをまっ先に引き受けた太田さんは、子どもたちを受け入れたことで、新たに農業という仕事に誇りがもてたという。太田さんのところにファームステイをして農業体験をおこなった東京の中学２年生の男の子が、「将来は農業をやりたい」と手紙をくれた。夏休みに子ども長期自然体験村にやってきた学校を休みがちだったという女子中学生も、「２学期はがんばって学校に行くからね」と太田さんにそっと誓った。

「みんな、いい子ですね。農業をやっていたからこそ、こんな子どもたちと出会えたわけでしょ。うん、百姓はいいよ――今なら、なおさら胸を張って、そう言えますよ」

太田さんの家では、今年度も 100 人ほどの子どもたちのファームステイを引き受けた。農作業の合間に中学生たちを近くの小学校に連れていったら、小学生が土産にあげたザリガニが縁で都会の中学生と飯田の小学生の交流が始まった。

「子どもたちを受け入れるようになったら、じいちゃんも元気になったし、だれが来ても話題に事欠かないし・・。子どもたちとふれあうと、何かほんわかしたものが心に芽生えてきますよ」

太田さんは地域で集まりがあると、「ぜひ、一度、受け入れてくんなんしょ」と、みんなにファームステイの受け入れを勧めるという。

子どもたちの農村体験の利点は、まず農家が、農村が元気になれることだ。そして、その農村にやってくる子どもたちもまた元気になれる。この循環こそが最大の成果と言えそうだ。

（協力：飯田市役所、取材：蜂須賀裕子）